



ཇུལ་ལ་ལ་དག་པོ།

JULAY LADAKH

Newsletter vol.1 Dec.2004



ラダックとは

ラダックはインドのジャンムー・カシミール州の最北部にあります。標高3,500mにもおよぶヒマラヤ山岳地域にあることから、冬は厳しい寒さに見舞われる一方、夏は気持ちのよい暖かな日が続きます。“リトル・チベット”とも呼ばれるラダックに暮らす人びとは、独特の伝統や文化、自然を大切にしている習慣をもち、誠実に平和を愛することで知られています。加えて、各地で催される祭り、連なる渓谷や雪峰、湖などの美しく壮大な眺望、チベット仏教寺院は、多くの冒険心あふれる訪問者を魅了してやみません。6月から9月にかけての4ヶ月間、ラダックは世界中からの訪問者を惹きつけています。

ツーリズムの発展によって、夏の間には就労や起業の機会を得ることができたラダック人もいますが、大半の人びとはほとんどその恩恵を受けていません。ラダックにはいわゆる産業がないため、人びとの現金収入の道がとても限られているのです。そのため、現金

収入のない家族は、子どもたちを学校へ通わせることが難しくなっています。現在、ラダックでの識字率は65%ですから、教育は人びとの関心を集めるべき問題の一つです。またラダックの女性は、社会の中で高い尊敬を集めているにも関わらず、多くの年配の女性たちは読み書きができないことか

ら、直接的な現金収入を得ることができていません。彼女たちが読み書きをはじめとする技術を身につけられるような機会や選択を用意する可能性を探ることが必要です。

ジュレー・ラダックとは

ジュレー・ラダックの活動目的は、技術や知識、体験、文化を通して日本とラダックの掛け橋となることです。そのために、社会的に弱い立場にあるラダックの女性や子どもたちが、教育や経済的発展を手にすることができるよう状況改善を目指します。女性の所得向上が、彼女の子どもたちが教育を受けることを可能にするからです。

今年ジュレー・ラダックが行なった2つのスタディツアーの結果、わたしたちの主な事業として「女性の収入源としてのベリー生産」と「子どもたちの健康と教育」に対する支援に取り組むことにしました。加えて、ラダックから学べることを活用して、日本における子どもに関わる活動との共同事業も考えています。スタディツアーや交流ツアーを通して得る知識や体験から学ぶこと、そしてそれを応用することは、ジュレー・ラダックの中心活動の一つです。

またこれまで、ラダックで支援を必要としている人びとによりよい支援を行うことができるようにと、資金づくりやPRのための活動やイベントを行ってきました。今後もこうした活動を継続していきます。





JULAY LADAKH Study Tour 2004

スタディツアー レポート



第1回のラダックへのスタディツアーは、2004年6月24日から7月7日までの日程で行われ、5名の参加者がありました。

このツアーの目的は、ラダックの独自の文化、伝統、ライフスタイル、さらには開発問題やそれに対する視点を、参加者が自ら見て経験して感じ取るということです。また今回は、ラダックで活動する5つのNGOや、ラダック自治山間開発会議 (Ladakh Au-

tonomous Hill Development Council) の政府行政評議員に会う機会も得ることができました。そしてこのツアーの主な目的の1つである、12年に一度開催されるヘミス・ゴンパでの大祭 (ヘミス祭) と、ナローパ儀式 (ナロギヤントウック Narogyantook) にも参加しました。以下がスタディツアーの主なプログラム、そして参加者が学んだことです。

(T・M氏、Y・H氏、K・S氏)

【アムチ訪問】

「アムチ」とはラダックの伝統的な医師のことを言い、その伝統はチベットの医療システムに基づいています。アムチの療法では、主にラダックの高山から採集されたハーブを原料とした独自の薬を使用しています。参加者はアムチの診療所や自宅を訪問し、伝統に基づいた薬の製造過程から診療の様子までを視察することができました。

【ヘミス祭への参加】

ヘミス・ゴンパはラダックにおいて最大かつ有名な僧院であり、首都レーからおよそ40キロの地点に位置しています。今回は12年に一度の大祭の年にあたり、地元民と共に多くの外国人観光客も訪れ、修行僧による仮面舞踏や普段は決して目にするのでできないシルクで作られたタンカ (チベット仏画) などを鑑賞することができました。



【ラダック自治山間開発会議・レー事務所への訪問】

ラダック自治山間開発会議はインド中央政府によって特別な政治的地位を与えられていることから、ジャンムー・カシミール州において独自性を保っています。この訪問で参加者は、ラダックが現在抱えている、地理的条件や政治的立場に起因する社会問題・開発問題、さらにはラダックの将来について話し合いました。



【ホームステイ】

ホームステイ・プログラムは、ラダックの家族と共に一日を体験するものです。参加者はホームステイ先の家族の料理や農作業、牧畜などを実際に手伝い、自然と共に生きるラダックの人びとの暮らしを直接体験することができました。

【ナロギヤントウックへの参加】

ナロギヤントウックでは、聖ドゥクチェン・リンポチェ (ドゥクパと呼ばれる仏教宗派の最高責任者である転生ラマ) が「目にするだけで無限の輪廻から解放される」と言われる6つの聖なる装飾具を身に付け、人びとに慈悲を授けます。12年に一度行われるこの儀式は、ラダック人にとって極めて特別な意味をもつもので、今回のために特別に作られた会場には、何万人もの人びとが詰めかけました。

【現地NGOへの訪問】

ツアーの間、参加者はラダックで活動している5つのNGOを訪問し、それぞれの団体に取り組む問題に関して意見を交換するとともに、今後のジュレー・ラダックの活動を考える上での貴重な情報を得ることができました。





ラダックの女性たち

ジュレー・ラダックでは、女性たちの所得向上を支援したいと考えています。まずスタディツアーを通して現地の状況を知ることから始め、今後の活動につなげていきます。今回は、ツアーに参加下さった方々のレポートをご紹介します。

「レーベリー」との出会い

M・Sさん（第2回スタディツアー参加）

空路より陸路で行く方が値段に3倍も違いがあるという一点で、2泊3日かけてデラックスバスでデリーからラダックの首都レーに向かうルートに決めたのが、すべての始まりでした。事前に高山病に注意との警告を受けていたので、予防策である水分とカロリー補給のための準備は完璧でした。しかし、標高5,000mを越すキャンプにて高山病に見舞われてしまいました。頭痛・吐き気・食欲不振に苦しんでいる私たちを救ってくれたのは、一緒に乗客している人たちです。唯一日本人のマサさんと日本語堪能なアメリカ人サラは、励ましの言葉とともに何やらオレンジ色の飲み物を手渡してくれました。これこそ「レーベリー」という高山病にも良く効くジュースとの衝撃的な出会いです。彼らの温かい支えと「レーベリー」により無事、現地に到着することが出来ましたが、その後の旅ですっかり「レーベリー」に惚れ込んでしまったことは言うまでもありません。

この「レーベリー」の人気の秘密は、原材料であるシーバックソーンという世界でも有数のビタミンCが豊富な果物にあります。この果物の効用は広範囲に及び、健康食品として認識されているのです。10年前にラダックの女性たちのグループは、この果実からジュースやジャムを生産して現金収入を得ていましたが、近年商社が進出して女性たちの仕事を奪い、所得を得るのが難しい状況にあります。そこで私たちは地元の人たちの雇用と現金収入をもたらすとともに、日本とラダックをつなぐという形でのフェアトレードを実現できないかと考え始めました。現在、どのように関わっていくのか議論の段階ですが、シーバックソーンはラダックの一つの重要なキーワードだと思っています。

※第2回スタディツアーは、現地集合・解散で実施されたものです。

ラダックの家族

S・Tさん（第1回スタディツアー参加）

ラダックの家族は基本的に農業を基盤とした生活を営んでいますが、近代化の影響によって家族の生活様式は変化し始めています。目立った変化は母親の畑仕事への負担が大きくなっていることでしょうか。父親は現金の必要性から賃金労働をするようになり、子どもは教育が普及することによって家事の手伝いができなくなっています。その結果、収穫前の比較的仕事量が少ない時期においても、家事はもちろんのこと朝から日が暮れるまで畑仕事や家畜の世話といった力仕事に、母親は日々奮闘しています。労働力不足から賃金労働者を雇っている農家もいるほどです。

ラダックの家族は伝統的な生活より近代化による生活水準の向上を望んでおり、そのしわ寄せが、生活の基盤である今までの農業スタイルの変化となって現れはじめています。世界中でおきている農村社会の衰退が今ラダックにも起きているといえるかもしれません。もちろん、家族全員で畑仕事をやる習慣は未だ色濃く残っており、時間の許す限り父親も子どもも良く働き、主食である大麦は一年間に必要以上の収穫があります。しかし、農業の働き手の中心である母親が働けなくなったときにラダックの家族は大きく変化することになるかもしれません。

ボランティアの募集

ジュレー・ラダックでは随時ボランティアを募集しております。ジュレー・ラダックの活動をご理解くださる方であれば、年齢・性別等は問いません。主な活動日は毎週火、土、日曜日の10:00～17:00となっています。関心のある方は、事務局までお気軽にお問い合わせください。

組織報告

ジュレー・ラダックの組織体系とその役割

ジュレー・ラダックの組織は代表、理事会、監査そして運営委員会から成っており、現在、理事会4名、監査1名、運営委員会4名で構成されています。

運営委員は代表が会員の中から任命します。そして基本的に代表とともに団体の活動全般について出席者の半数の賛同を得ることにより、団体の運営を行います。また理事は運営委員会が会員の中から選任し、運営委員会で議決された団体の事業計画・予算等の重要事項に関して、出席者の半数の賛同により承認を行います。

この2つの機関を繋ぎ、それぞれの意見交換をスムーズにしているのが、理事の中から運営委員会が選任する代表です。この代表の存在が、現在の開かれた団体を作り上げているとあって過言ではないのです。

会計および監査

ジュレー・ラダックでは将来のNPO法人化へ向けて会計制度の充実を進めています。これまでの活動は皆様の会費や寄付、またイベント参加における収入等を資金として実施してきました。主な支出先は、イベント参加・準備費やスタディツアーの諸費用、事務所での諸経費等となっております。

監査は半期に一回行われます。ジュレー・ラダックの発足は2004年3月ですので、2003年度と2004年度前期（4月から9月末まで）の監査を同時に、12月初旬に実施しております。2004年度以降については、毎事業年度終了後3ヶ月以内に、貸借対照表及び収支計算書を作成し、監査を受けたのち総会において承認を受けることとなります。承認を受けたのちは、会員の皆様にニュースレター等で報告する予定です。

理事

大河内秀人
神仁
トム・エスキルセン
スカルマ・ギルメット（代表）

監査

昼間勝子

運営委員



一般会員



（敬称略、2004年11月末日現在）

★ジュレー・ラダック会員募集中！
詳しくはHPをご覧ください、事務所までお問合せください。

◆スタディツアー報告会のご案内

ジュレー・ラダックでは、ラダックへの2回のスタディツアーならびにメンバーによる農村体験によって得た多くの事のご報告と共に、より広く皆様にラダックについて知っていただくために、報告会を計画しています。また第3回スタディツアーのご案内も行います。

＜時期＞2005年1月下旬

＜内容＞■スタディツアー報告（「参加者が学び感じたラダック」についてのご紹介です） ■農村体験報告（実際の農業体験から得た貴重な報告です） ■写真・映像の紹介（「懐かしく美しい」ラダックの風景を存分にお楽しみ下さい） ■第3回スタディツアーのご案内 ■懇親会（ラダックの料理や飲み物をご用意する予定です）

＜その他＞場所・時間等につきましては、詳細が決まり次第、改めてご案内致します。

◆第3回スタディツアー

ヘミス祭でチベット仏教の真髓を垣間見て、ホームステイや伝統医アムチの訪問などでラダック文化の奥深さに触れ、そして現地NGOを訪問しラダックが現在抱える問題を考える。そんな単なる旅行では決して知ることができない真のラダックがここにはあります！この機会にぜひ体験してください！

実施内容（予定）

＜期間＞2005年6月12日（日）
～6月22日（水）（10泊11日）

＜参加費＞235,000円

（学生・会員の方は5,000円割引）

*内容は変更になる可能性があります。詳細は追ってご案内致します。また上記参加費以外に、会員でない方には会員費がかかります。



発行: Julay Ladakh 〒131-0013 東京都江戸川区東小松川3-35-13-204

TEL: 03-3654-9188 / FAX: 03-3654-9188 Email: julay@edogawa.home.ne.jp

http://members.edogawa.home.ne.jp/julay （事務所へのお問合せは火、土、日曜日をお願いします）